

ふくい仁愛音楽療法研究会

仁愛女子短期大学 准教授 野 尻 恵美子

ふくい仁愛音楽療法研究会では、平成22年度に以下の2回の研究会を行いました。その研究会の内容をご報告します。

1. 4月24日 (土)

「音楽療法におけるQOLとWell-beingについて

—高齢者への実践を通して—

講 師：貫 行子

(日本音楽療法学会認定音楽療法士 本学客員教授)

1. QOLという概念

- ①歴史
- ②“Life”という語のとらえ方
- ③WHOによる定義：mental, physical, social, spiritual
- ④貫の考え「生命の質」

2. 高齢者音楽療法の意義

- ①介護予防
- ②治療として
- ③人生のターミナル・ケアとして

3. 高齢者音楽療法の現状

- ①治療構造の形態
 - セラピストの施設訪問による活動的音楽療法
 - 受容的音楽療法
- ②音楽療法のプログラム内容
 - 各セラピストの治療理論に従う

4. 高齢者音楽療法の効果と研究法

- ①量的研究
 - Evidence based Music Therapy
- ②質的研究
 - 事例研究、ナラティブ・アプローチなど
- ③両者の混合体 (Aigen,K.)

5. 事例研究への道のり

日本の音楽療法界ではEBM志向の研究が推奨されてこれまで量的研究が多かった。

高齢者に20年余の臨床経験とおして「加齢という現実」は避けられないという認識。

それでも音楽療法の意義は存在する。それは何か？

「質的研究」への世界的な流れがある。

6. Well-being を考察するために

- ①事例：ライフストーリーの視点から
- ②事例：ナラティブによるアプローチ

7. Well-being とは

「幸福」「福利」「健康」と訳されている

欧米の音楽療法の定義の中で、「目的」として多く挙げられている

①Bruscia,K.: 健康の意味合いがよい

Bunt,L.: 幸福の意味合いがよい

②“より良い状態”ととらえる

③主観的なWell-being の重要性

④Well-being に近づくための将来的な一つの研究法

⑤Narrative approach / Narrative based Medicine の提唱

8. 結論

①Well-being はQOLの核をなすものである。

②個人にとって主観的なもの、その要因は個人ごとの文化、養育環境、価値観によって異なる。

③人生のターミナルにあつて、音楽療法では精神的な満足感、幸福感をもたらす。それは、セラピストとの人間関係の樹立、音楽する喜びによる。

④人間らしい生涯を全うしたい→スピリチュアル・ケアでもある

《参考文献》

*貫 行子 2009：新訂 高齢者の音楽療法 音楽之友社

*Flick,U. 小田博志ほか訳 2002：質的研究入門<人間の科学>のための方法論 春秋社

*江口重行・斉藤清二・野村直樹 2006：ナラティブと医療 金剛出版

*池上直巳ほか編 2001：臨床のためのQOL評価ハンドブック 医学書院

II. 10月9日（土）

「児童の音楽療法～事例紹介～」

「重度重複障害児を中心に」

講師：鈴木 千恵子

（日本音楽療法学会認定音楽療法士 玉川大学講師）

1. 事例紹介・A君 低酸素脳症による後遺症

A君は低酸素脳症の後遺症による重度の障害を抱え、四肢に麻痺があるため生活は全介助である。心臓に大動脈縮窄という病気を抱え、生後14日また5ヶ月の時の2回に渡り手術を受けた。5ヶ月の手術時に低酸素脳症になり視覚の働きがほとんどなくなった。聴覚の働きはあり主治医から音楽を聞かせることを勧められた。心臓と脳に重い障害があるため気温の変化になかなか対応ができず、季節の変わり目や冬は体調が安定しない。このような時期は呼吸もうまくできなくなり常に医療的ケアが必要である。

音楽療法はA君が4歳半から2年間、1回40分程度の個人音楽療法を行なったが、体調が悪い時も多かったので毎週行なってはいない。

<目的>

- ① 音や音楽を聞くことによる心身の緊張緩和を図る。
- ② 楽器に触れたり身体活動を行なうことで運動表現を促進する。

<実践の結果>

- ① 多くの快い音楽に触れることにより、音に対する過度の敏感さが減少した。
- ② ライアーの弦をはじくというような能動的な行動が獲得できた。
- ③ 音楽活動により、声の表出、手や足の運動、笑顔などの運動表現が促進された。

2. 事例紹介・B君 脳形成不全、前全脳胞症による水頭症
音楽療法はB君が8歳11ヶ月から始め、24歳まで行な

われた。（個人音楽療法、週1回45分）主訴は脳形成不全、前全脳胞症による水頭症で生活は全介助である。妊娠中異常はなかったが、予定日より20日遅れで生まれ難産。回旋異常で生まれた。四肢体幹麻痺として出産直後、脳外科に移され生後2日目に脳頭頂部の大手術を行なった。以後、10歳までに9回のシャント手術を行ない入退院を繰り返した。小学5年生の時、シャント癒着が原因で意識障害を起こし、集中治療室に5ヶ月半入院した。主治医の指示により音楽療法是集中治療室でも行なわれ、また退院後もすぐ開始した。外界の情報は視覚より聴覚で受容することが多いが、脳障害が重いため記憶する力や情報を統合する力は弱い。

<目的>

- ① 音楽を媒体としたコミュニケーションを促進する。
- ② 感覚運動段階の学習を通して認知の発達を促す。
- ③ 生活の中で音楽による遊びや楽しみを増やす。

<実践の結果>

音楽療法の実施期間が長いので各期間の詳細は省略するが、集中治療室に入った際には本当に音楽に支えられたと保護者からの感想をいただいた。また、遊びの少ないB君が木琴やピアノを奏で日々の生活の中で遊べるようになったことは、音楽活動が対象関係や認知の発達の援助として活用できたと考えている。

●重度重複障害児に音楽を用いる意義

- ① 音楽が基本的には聴覚の活動でありながら他感覚との関連が強く、音や音楽を聴くということは、音の持つ響きや振動を触覚や固有覚を通して感じ取っている。
- ② 音楽は知的過程を通らずに直接情動に働きかける特徴を持っているため、重症児との原初的、前言語的なかかわりが可能である。

・ ・ 配慮する点 ・ ・

子どものテンポやリズムに合った音楽を提供する。また、音刺激は充分慎重に扱う。

3. 発達障害児の実践紹介

コミュニケーションを促進する音楽の使い方
《参考文献》

「音楽療法の実際 ～音の使い方をめぐって～」
松井紀和、鈴木千恵子他 共著 牧野出版